

経営者のTさんは、今の仕事を始めた頃、腹部の激痛に襲われ、病院に駆け込みました。病名は十二指腸潰瘍で、一カ月程の入院生活を余儀なくされたのです。投薬の効果で痛みは治まったものの、Tさんは、あることに悩まされることになります。それは、しばらく食事が摂れないことでした。点滴をしているので肉体的には何ら問題はありません。しかし、約一週間、絶食しなければならず、食べ物は一切口にできなくなりました。本を読んで気を紛らわせ、食べ物のことを忘れようと努めます。しかし、夜中に何度も目が覚めたり、終いには食事をしている夢を見る始末。そんな自分を情けなく思うと共に、空腹の辛さを初めて実感したのでした。

いよいよ絶食期間の終わりを迎えた日のこと。重湯をスプーンで口を含んだ瞬間、全身が震え、体中に力がしみわたっていく感覚を覚えました。この感動は今になっても忘れられないといいます。そして、Tさんはこの入院経験を通して、人間にとっての「食事」の意義を痛感したのでした。

第一に、食は人が生きていく上での根元であるということでした。事業をはじめ、あらゆる社会活動（政治、経済、宗教、芸術……）は、煎じ詰めれば「食べること」から出発し、そこに行き着きます。「食」について考えることは、「生」を考えることであり、そこを疎かにして人生は成り立ちません。当たり前のことですが、食こそ生きていく上での根元だと自覚したのでした。



「食」について考えることは 「生」を考えること

第二に、食事は「礼儀」のもととなるということです。食事を再開した時、自ずから「ありがたい」という感謝の気持ちが沸き上がり、背筋がピンと伸びるような厳かな気持ちになったのでした。

世界の食文化は多様で、さまざまな食に関する作法があります。それらは総じて生命を尊ぶ気持ちから発しているといってもよいでしょう。なぜなら、人は他の生命をいただき、それによって生かされている存在だからです。そうであるからこそ、食事に対しては最大限の礼節をもって対するべきだと入院中にTさんは思い知ったのです。

第三は、食事とは、自他（食する側と食される側）の「生命」に真向かい、それらが交わる場であるということでした。

Tさんが不思議に思ったことは、点滴で栄養は補っているのに、あれ程食べ物を欲したことです。重湯を口にした時、全身に痺れるような感覚を覚えて以来、「人間が生きていくには、物質だけではない別の何らかの力が働いているのではないか」と思い始めました。時が経ち、今ではそれを、食物からいただく「生命」の力と捉えていると言います。

Tさんの体験に限らず、誰しも多かれ少なかれ空腹の辛さ、食物の有難さを感じたことがあると思います。食事の際には、そのことを忘れずに、感謝の思いで料理をいただきたいものです。それは、最高の調味料となるだけでなく、きっと私たちの生きる力を高めてくれることでしょう。